特集 丸尾末廣

麗しき パクリ人生

進学したって仕方がない

——丸尾さんはどんな少年時代を過ごしたのですか？

丸尾　家が超貧しかったんだよね。今思い出してみると、小学一年から六年までずっと同じセーター着てたんだよね(笑)。そんなこと全然覚えていなかったんだけれど、写真見てたら「アレッ、同じセーターじゃないの」って気が付いた。六年のときにはもう袖がツンツルテンになっててね、肘に穴が開いているんだよ。きっと入学式の時に買ったんだよね。そのままずっと着てたんだね(笑)。

——たしか兄弟が沢山いる、と言ってましたよね。

丸尾　七人兄弟の末っ子。一番上の姉と歩いているといつも親子だと思われてた。姉って感じはしないよね、ほとんどおばさんだよ。

——それで、どんな少年だったんですか？

丸尾　いつも閉じこもっていた。もう家では何も喋らなかったね。

——親とも？

丸尾　うん、憎んでいたわけじゃなかったけれど全然興味がなかったの(笑)。なんか自分の親として認めたくなかったんだよね。「こんなのが俺の親であるはずがない」って思ってた(笑)。恥ずかしいっていうか、とにかく友達にみられたくないという気持ちが強かったね。

——親は「どうして喋らないのか」と聞いてきたりはしなかったんですか？

丸尾　うん、言ってたような気もする。『変な奴だなあ』と思っていたみたいだよ。何かやりにくそうにしてたね。どうやってこいつに接すればいいのか分からない、って感じだったね。それまではそういうタイプの例を知らなかったわけだから、戸惑っていたみたいだった。

——それじゃ、例えば父親と喧嘩もしなかったんですか？

丸尾　一度もない(笑)。喧嘩にもならないんだよ。だって自分が生まれてから父親が死ぬまでに、全部あわせても五分くらいしか喋ったことないんだもの(笑)。

——五分！返事だけまとめても、もう少し多いですよね(笑)。

丸尾　そうだよね(笑)。きっと父親も内心「コイツ、何で俺と口きかないのか」って思ってたんじゃないかな。「嫌われてる」とかねえ(笑)。

——母親に対しても同じだったんですか？

丸尾　もう馬鹿にしてたね(笑)。「何、この人」と思ってさ。

——子供の頃からすでにそういう感情を持つ、っていうのは結構マセた子供だったんじゃないですか。

丸尾　そうだよねえ。

——普通、末っ子って、いつまでも母親のあとをついていたりするけど…。

丸尾　あんなのの後ついて行ってどうすんの(笑)。

——じゃあ、食事の時間なんて地獄のようじゃないですか。

丸尾　シ——ンとしてた(大爆笑)。おまけに父親は食事のときに喋ったりするのを嫌う人だったんで、みんな黙々と食べてさ、終わるとバラバラに散って行くの。マズイものをなおさらマズク食べていたよ(笑)。

——普段は閉じこもってなにをしてたんですか？

丸尾　しょっちゅう絵をかいていたね。漫画の本見てそれを真似してかいていた。窓ガラスに漫画の絵をうつして模写するのをよくやっていたよ。「少年マガジン」の『エイトマン』とかさ。でもそうやっておとなしくしているのは家の中だけで、学校なんかではむしろ騒ぐ方だった。すごく目立つ子供だったね(笑)。

——外弁慶。

丸尾　そうだよね。外に出るともう騒いでたから。でも中学頃から休み癖が付いちゃってさ、それからあまり学校へも行きたくなくなったんだよね。

——なにか原因があったの？

丸尾　それがさあ、昼の十五分くらいの連続ドラマで「氷点」をやってて、それが見たくて一週間休んだの、それが切っ掛け(大爆笑)。

——そんなに休んでばかりいたら問題児になるでしょ。

丸尾　なるよね、やっぱり。「あいつなんでもないくせにウソついてすぐ休む」とかね(笑)。でももう行く気がしなくなっちゃうでしょ、そういう癖がつくと。

——それで高校進学も考えなかったんですか。

丸尾　進学したってしょうがないよ。それにとにかく家にいたくなかったから。

——だいたい丸尾さんくらいの年代の人は、とりあえず高校までは行って、と考えるでしょ。中学でたばかりで親元を離れて、というのはちょっと考えにくいことですよね。環境のせいもあったのかもしれないけれど、結構自立心の強い少年だったんですね。

丸尾　そうだよね。それに我も強かったから人の意見なんて全然聞かない子供だった。宿題やってると姉が「ここはこうだよ」って教えてくれるのね。その方が正しいのに自分の間違った答えを押し通すの(笑)。それに、もう家にも執着心がなかったからね。それで一人で東京に出てきちゃったんだよね。

十九でスリの見張り役!?

——上京して何処に住んだんですか。

丸尾　凸版製本に勤めたから、最初は板橋の寮に入っていた。確か花輪さんは赤羽の大日本製本だったんだよね(笑)。三年いたって言ってたよ。でも俺は二年(笑)。十五から十七までね。凸版のなかで「週刊明星」とか「漫画アクション」の製本をやっていたんだよ。でも途中で寮を出て板橋の志村坂上に初めて部屋を借りた。四畳半で五千円だったね。ボロいアパートでさ共同の台所にナメクジが這ってるんだよね。蛇口のあたりをヌメヌメと這ってるの(笑)。

——で、凸版はどうしてやめたんですか？

丸尾　それがまた一週間無断欠勤しちゃ

丸尾末広インタビュー

って(笑)。それでもういいや、やめよう、ってなったわけ。会社の人は喜んでたけどね(笑)。

——いつも思いのままですねえ(笑)。

丸尾 そうそう。それで、やめてからメチャクチャになったんだけどね。

——それじゃ、そのメチャクチャなところを…。

丸尾 働かない、何もしない、金もない、だね(笑)。たまにアルバイトして金ができると引っ越ししてた(笑)。

——万引きはそのころからしてた?

丸尾 うん、してたね(笑)。最初本を盗んだんだよね。それからやたらと盗むようになったの(笑)。あのね、俺、篠原勝之さんと同じ本を同じ店から万引きしてたんだよね。高畠華宵の限定画集で三万円のやつ(笑)。篠原さんは毎日行っては少しづつ位置をずらしておいて取ったってテレビで堂々と話してた(笑)。俺はさ、ガラスケースさわったら開いちゃったもんで、ダンボールの箱はそこにおいたまま、中身だけもってきたの(笑)。

——持ってきたって、剝き出しで?

丸尾 そう、変に隠すと怪しまれるから。そんなもんだよ(笑)。で、喫茶店に入ってさ、ウットリと眺めていた(笑)。「ワッ、すごいっ」てさ(大爆笑)。

——親は知ってるんですか、そういうことやっていたのを。

丸尾 知ってるでしょ。だって家にいるときも親の金とってたから(笑)。三十円くらいなのにさ、そんなことで大騒ぎするんだからやだよねえ(大爆笑)。小遣いくれないから盗むのにねえ(笑)。

——以前、青林堂で箱根に行って、土産屋をのぞいていた時「こういう時だからやめてよね」って言ったらもうすでに半纏の袖にジャラジャラ入ってた、っていうこともありましたよね。

丸尾 あっ、あったねえ(笑)。

——それで、大きな猫の置物見て「これは袖に入らないからだめだ」っていってたでしょ。

丸尾 そうそう、そんなことあったね、忘れてた(大爆笑)。

——で、そのころは漫画は描いていなかったんですか?

丸尾 「描こう描こう」と思いながら全然描かなくてさ、何も目的もなくただブラブラしていただけだよ。描き始まったのは十九くらいからかな。一度ガロに持ち込みしたことあったよ。あの階段を昇るとき、もうドキドキしちゃって(笑)。でもだめだった(笑)。

——何ていうタイトルでした?

丸尾 「卍仮面」だった(笑)。長井さんが見て「これは面白くないね」って。たしか南さんが紅茶を入れてくれたっけ。その頃南さんがまだ髪の毛が長くてニヒルなインテリ青年みたいにしてたよ。

——で、それはまだ持ってるんですか。

丸尾 捨てちゃった。

——サッパリしてるね(笑)。スリのおじさんと知り合ったのはそのころですか?

丸尾 そうだね、十九の時だったね。おじさんがスリを働いているところを目撃したら、あっちから声をかけてきて、「一緒にやらないか」って言われたの。その時たまたま知り合った漫画家志望のやつが一緒にいて、そいつ住所不定だったから先に知り合いだったんで紹介されたか

たちでね。それで三人で一カ月くらい一緒に行動していたよ。赤羽あたりでやってた（笑）。

——見張り役とかやってたんですか?

丸尾　そうそう。やり方なんてかなり大雑把でさ、荷物からちょっと離れたスキにパッと捕るだけなんだよね。人が考えるほど高等なテクニックじゃない。あれなら俺でもできると思ったけど、やっぱり出来ないんだよね。それにただの見張り役だったから、ご飯をおごってくれるだけで、金はもらってなかったよ（笑）。

留置所で出たガロの話

——捕まったのはその後ですか?

丸尾　そう、その後万引きで捕まったんだよね。二十くらいだったかな。

——どこで?

丸尾　秋葉原のレコード店で。

——何を盗んだの?

丸尾　ピンクフロイドとかサンタナとかね（大爆笑）。あのころ流行ってたから。それでガードマンに押さえられてさ。もうしょうがないと思って、一回留置所経験しようと開き直った（笑）。

——どのくらい?

丸尾　二週間くらいかなあ。

——長いですねえ。

丸尾　それはね、その時俺住所不定の無職だったからね。初犯だったら普通は説諭だけで帰されたりするんだけどね。でも身元がはっきりしないと厳しいんだよ。俺さ、そのころは友達の所に荷物を預かってもらって、自分は蒲田の一泊五百円の木賃宿に泊まってたんだよね。

——取り調べも厳しかったんですか?

丸尾　それがさ、面倒臭くっていい加減に言ってたら向こうがすごく怒っちゃって（笑）。チャランポランだし反省の色もないから、懲らしめようと思ったんじゃないの（笑）。

——じゃ、その間ずっと雑居房に入ってたんですね。

丸尾　そう。留置所だからね。留置所、拘置所、刑務所だからね（笑）。拘置所にはいってないから、起訴されてないからさ、前科にはなっていないんだよね。だから賞罰はないの（笑）。それで、本はよんでもいいけれど、寝転がったりしちゃいけないんだよね。でも一日に一回タバ

コタイムがあって、ベランダみたいなところにだされてラジオ体操をしたあとに一服出来る。あっ、そういえばその時の同じ房に、ガロ知っているひといたよ(大爆笑)。

——やだねまったく(笑)。

丸尾 話しをしていたら漫画の話題になってさ、「おまえ漫画好きなのか、ガロとか読んでないの」って聞くんだよね(笑)その人、組合運動で公務執行妨害で捕まったらしくてさ。池上遼一さんとか林さんのファンだって言ってた。池上さんとか林さんの特集号持ってたって言ってたと思う(笑)。

——それで結局起訴にならずに釈放されて、その後も懲りずに万引きはやってたんですか?

丸尾 まあ、しばらくはやってなかったよ。で、また引っ越したりしていた。あと網走のパチンコ屋でバイトしたりしてね。

——網走!?どうしてまたっ?

丸尾 北海道に遊びに行ったら、たまたまそこのパチンコ屋で店員を募集していたのね。で、やろうかなって思って(笑)「東京の人間だけどいいか」って聞いたら「いいよ」っていうんでやったの。で

丸尾漫画はパクリの集大成

——それで結局デビューしたのは二四歳の時でしたよね。

丸尾 そう、サン出版の何ていう雑誌か忘れちゃった。確かポルノ雑誌だったと思うけど、そこで「リボンの騎士」でデビューしたんだよね。その後、久保書店とかに持ち込んで「漫画ドッキリ号」に

も毎日便所掃除ばっかりでさ(笑)。それがきったねえ便所で、トイレットペーパーが水に溶けてドロドロになってるは糞はついてるしさ。それに寮に入れてもらってたんだけれど、三畳の部屋がベニヤ板で仕切ってあって、醤油で煮しめたような蒲団しかないんだよね。そこに一カ月いたよ(笑)。ここにいた時、蒲団の中で新聞読んでたら、歌手の克美しげるが愛人を殺して逮捕されたニュースがでてたよ(笑)。

——結構平気で飛こむんですね、そういうところに。

丸尾 そうそう(笑)。

——でもやっぱりいつも漫画の事は頭から離れなかったでしょう。

丸尾 そうだね。引っ越しするたび「よし、今度こそちゃんとやろう」っていつも思ってたから。でもけっきょくやらないんだよね(笑)。でも一度どこかの雑誌に同人誌の募集して、それで一時期漫画家志望の人と会っていた時もあったけれどね。でもあの人なんかそのときもう半分浮浪者みたいだったから、どうしているんだろうね。そのまま浮浪者になっちゃたかもね(笑)。

描いていた。そこで随分書き溜めたから、単行本も出せたんじゃないかなあ。

——「漫画カルメン」とか「漫画ピラニア」とかに描いたのは、その後?

丸尾 そうだね。俺さ、「大快楽」とか「エロジェニカ」とか「劇画アリス」なんかではやっていないんだよ。一歩出遅れた

っていうか、あのエロ劇画雑誌ブームからはもう二年くらいたっているときだったから。

——一時期随分いろんな人が描いてましたからね。

丸尾　ひさうち(みちお)さんや平口(広美)さんとかね。でも俺が描き始めたころはもうブームも下火になって来てたんだよね(笑)。

——丸尾さんの絵柄というのはどこから生まれてきたんですか?

丸尾　あちこちからいっぱい引っ張ってきてミックスした絵なんだよね。だから絵柄なんてどうにでもできるよ。この絵はだめだからほかの絵柄にしろって言われたら、パタッて変えられる(笑)。

——でも、一番引っ張ってきたのはやっぱり華宵でしょ。

丸尾　そうだよね。とりあえずあれに一番近いね。

——最初に華宵を見たのはいつです?

丸尾　いつ頃だったかなあ。でも最初は全然好きじゃなかった。気持ちの悪い絵だなって思った(笑)。でも人物描写として一つのパターンがあるでしょ。だからそのパターンを華宵から持ってきたわけだよね。崩しながら(笑)。

——あと、よく夢野久作を引き合いに出されたりしませんか?

丸尾　よく「相当影響されたでしょ」なんていわれるけど、あんまり関係ないんだよね。だから要するにパクリなんだよ。あのさ、どうしてみんなパクリだっていわないのかなあ(笑)。「影響うけてますね」とは言うけど「これパクリですよね」って誰も言わないよ(笑)。「少女椿」のタイ

トルはモロにパクリだよね。パクリ以外の何物でもないよ（笑）。

——まあ、いいづらいのもあるんじゃないですか（笑）。じゃ、丸尾さんの漫画はいろいろなところからパクッてる、いわばパクリの集大成ですね。

丸尾 そう、パクリの集大成！（大爆笑）

——でも画力があるからパクれるんじゃないですか。パクろうと思ったって、そう簡単にできませんよ。

丸尾 まあ、真面目にかいてますから。でも絵ってうまくなろうと思ってやらないとうまくならないよね。描いていればうまくなるって思っている人もいるけれど、自然にはうまくはならないよ。どうすればうまく描けるかって自分で研究していかないとダメだよ。

——じゃあ、いろいろと研究しているから、次から次へと興味がわいてきて、一人のひとにものすごく傾倒する、っていうことはあまりないんですか？

丸尾 そうそう。一人の人にのめり込むまえに、今度はまた別の人が気になってくるんだよね。「ああ、こっちもいいな、あっちもいいな」てやってると、何か全部ほしくなってくる（笑）。だからあんなゴチャゴチャになっちゃうのかも。二者択一ができないんだよね。

——ストーリーのほうもいろいろなところからパクリまくりですか？

丸尾 俺の漫画は話の設定自体があまり独創的じゃないしね。「日本人の惑星」だって日本がもし戦争に勝っていたら、って言う設定だけれど、ブレードランナーの原作者のP・K・ディックが同じようなSF書いているんだよね。そういう設定て

よくあるし。タイトルはもちろん「猿の惑星」のパクリだしね（笑）。あとさ、ラジオの人生相談聞いてたら「お婆さんとセックスしている」っていう中学生がいたんだよね。それを漫画にした（笑）。そういうネタをストックしておくの。

——そういうことはまあ皆結構やってますよね（笑）。でも「腐ッタ夜」なんかは江戸川乱歩の「芋虫」でしょ。

丸尾 そうそう、俺の漫画では親子にしちゃったけどね。そんなもんだよ（笑）。

——目をなめるシーンがよく出てくるけれど、あれは？

丸尾 あれも何かに載ってたんだよね。でね、何であのシーンを繰り返し出したかっていうとあれも計算なんだよね。同じことを繰り返し繰り返しやってたら登録商標みたいになると思って（笑）。

——計算してますねえ（笑）。

丸尾 それ、デビューしたときから計算したの。なにか一つだけでいいから「あ、また出てる、またやってる」って水戸黄門の印籠みたいなもんを作ろうと思ったのね。するとみんな「あれはどういう意味ですか」て考えるらしい。でも意味なんてないんだよ（笑）。それに誰もやっていないことを考えたとかそういうことじゃないしね。そんなこと誰だってやってるよね。

リアルタイムで慮になる

——今回の作品はまた丁寧にかいてますね（笑）。

丸尾 漫画を書くのは久しぶりだったからね。でも今回はパクリあったかなあ。タイトルが「無防備都市」から「無抵抗都市」だね（笑）。なんかさ、パクッているとさ、自分で考えたのでも「これ、パクッたんじゃないかなあ」って気になってくるよ（笑）。でもそれでいいんじゃないかな。

——あれは戦後の焼け野原が舞台になってますね。

丸尾 そう、ほんの一カ月くらいの間のことを描こうと思っているんだけどね。

——あの辺の時代って興味あるんですか？

丸尾 うん、あるね。見たことないけどさ、なんか風景も人間もゴチャゴチャしてて闇市とか露店とかあってさ。全体的な雰囲気に魅力を感じるよね。

——どこかの時代に戻れるとしたら、やっぱりその時代がいいですかね。

丸尾 いやっ、もう一つ前の大正時代がいいね。別に思想なんてないんだけどね。

モダンな時代だったから風景も人も面白いんじゃないかなってただそれだけ(笑)都会の風景ね。田舎はあまり興味がないから。田舎だと横溝正史になっちゃうからね。

――八つ墓村とか(笑)。

丸尾 八つ墓村なんていやじゃない(笑)

――丸尾さんて思想とかそういうものじゃなくって感覚の方が大きいですよね。

丸尾 そうなんだよね。ビジュアル的なものが大きいから、読む方もあまり考える必要はないんだよ。

――そういったビジュアル的なものに高校生あたりの年代は結構敏感ですから丸尾さんの漫画は高校生、とくに女子高生に圧倒的な人気がありますよね(笑)。

丸尾 そういうとさ「信じられない」って言う人がいるんだよね。メジャー誌の編集者とかそういう人は信じられないみたい。その辺の感覚ってずれているよね。俺の読者はつげ義春さんの読者と同じ人達だと思っているみたいよ。実際には全然違うでしょ。

――でもそういった若いファンが次々と出てくるでしょ。ファンにとって丸尾さんの漫画っていつでもリアルタイムなんですよね。

丸尾 そういうところはあるかもね。卒業して行く人がいて、でも下からどんどん入学してくるみたいな(笑)。

――大繁盛じゃないですか(笑)。やはり十代後半に好きになる絵なんですよ。なんか懐古的で危ないような、独占欲をかりたたせるような雰囲気がありますからね。興味を持ち出すととことんのめりこんでしまうんじゃないですか。それに加えて絵に魅力がありますから。

丸尾 まあ、絵のほうは努力してるからね(笑)。でもこれから先、どうなって行くんだろうね。自分でもあんまり考えていないしさ。どうしようかなあ。この生活が一生続くのかな(笑)。まっ、いつかは漫画もやめるだろうね。

――でも絵の方はやめないんじゃないですか。

丸尾 うん、そうだね。なにかやらなきゃいけないし。でもとりあえず自分の好きなことやって飯が食えるんだからいいんだよね(笑)。

――今もうすでに、半分は画家みたいなもんじゃないですか。

丸尾 うん、漫画の注文とかはあまり多い方じゃないからね。

――まあ、雑誌はある程度限定されちゃいますからね。ジャンプなんかに載るようなタイプではないし。

丸尾 あっ、でも俺十代の頃ジャンプに持ち込んだことあったよ。だめだったけどね(笑)。

――家族は漫画を描いていることは知っているんですよね。

丸尾 知ってるけどね。たまーに帰ったりするとさ、一応こっちも気をつかって何か喋るんだけどシ――ンとしちゃってものすごくしらけるの(大爆笑)。俺の漫画の話なんか誰も触れようとしないしさ。禁句になってるんだよ。だめだよねもう。

――一応単行本は送ってるんですね。

丸尾 うん、イヤミでね(大爆笑)。

1993年3月4日
文責　編集部

父よ、あなたは偉かった ✡ 遠藤みちろう

ナショナル勃起、ナショナル勃起、ナショナルキッドのオチンチン、ナショナリズムのエゴイズム、ユーゴスラビア・ユートピア、悪魔の描いたユートピア、バナナのチンチン皮をむいたら三日と持たず腐り出した。

父よ、あなたは偉かった。ボクにはもう、一片のユートピアも残されてはいないのです。憎しみ合うことにしか、生きてる実感が感じられない、この貧相な体を、ネズミの餌にだけしておくのは、もったいないと、チヤホヤされるたびに手をこすり合わせて神頼み、神経質な潔癖症の女子高生の真紅なトサカのような陰部に、何度も何度も頭を突っ込んで、おしげもなくしぼり出した精液を、結婚式のウエディングケーキの生クリームの中に塗り込んで、あなたの夢みた人生の幸福を、参列者全員で祝福するのは白々しいと、今にしてボクは思うのです。

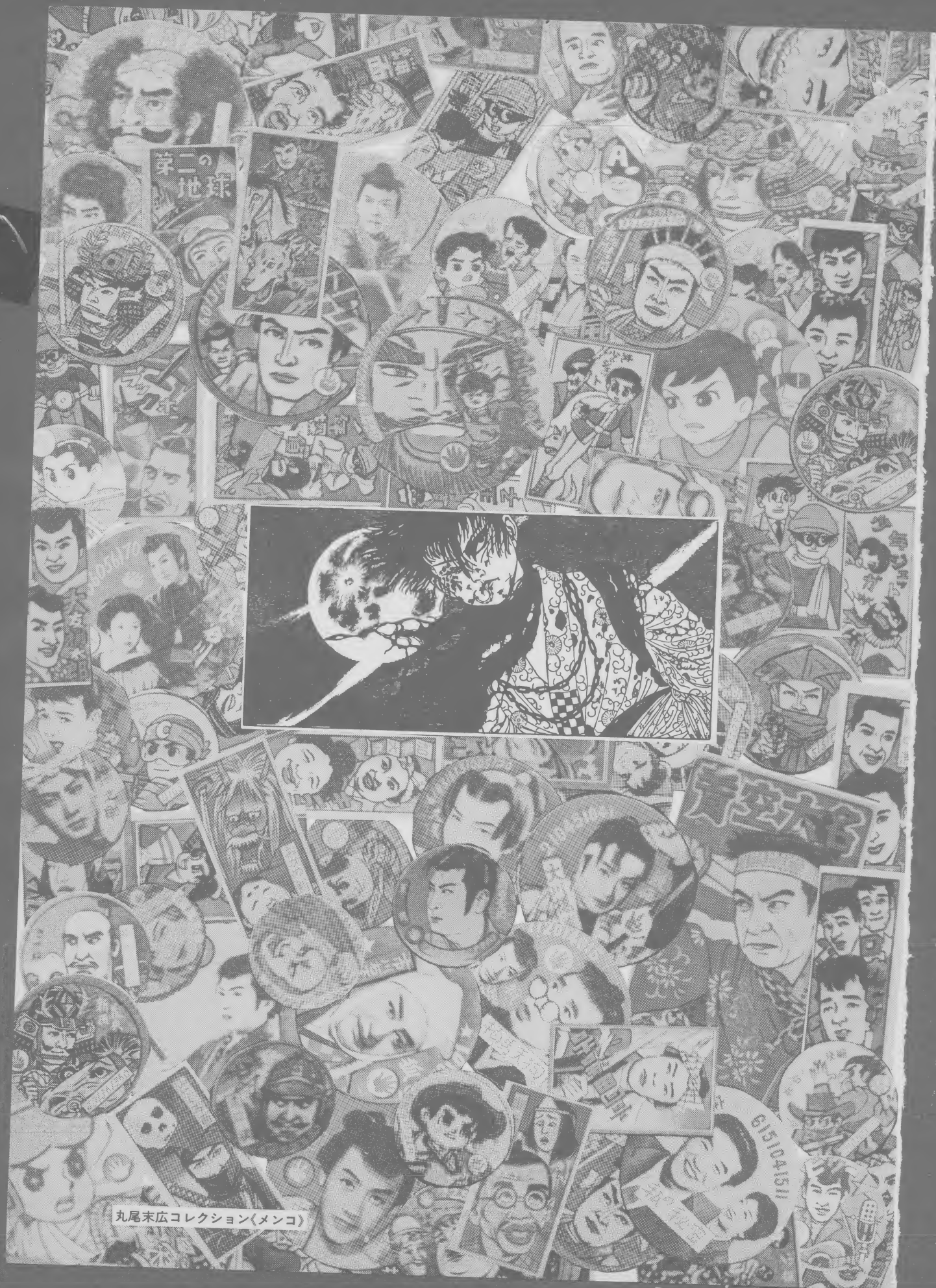
父よ、あなたは偉かった。傷口から、ウジ虫がムクムクと湧き出して、それが真っ白いゴハン粒に見えてしょうがなかった地獄の戦場から舞いもどり、平和を謳歌する建て売り住宅街の一本道で、ヒソヒソ話をする中年ババアの口の中に、役に立たなくなった領収書の固まりを無理矢理押し込んで、今夜の夕食のおかずはきっとサンマの南蛮漬けだと心を踊らせながら、足早に帰る姿を、こっそり誰かに見られたのではないかと、ついつい不安になってしまい、登校拒否症の息子をかかえた不幸な一家が金属バットで血塗られたニュースを、まるで他人ごとのように憐れむ妻のたれ下がった尻に、フロフキ大根の空虚さを感じているのをボクは知っているのです。

父よ、あなたは偉かった。小学校しか出ていない故の、人生の悲哀を、決して自分の子供には味あわせてはいけないと、コツコツ貯め込んだ郵便貯金の通帳に、もう何も残されてはいないと気がついた真昼間、ニキビ面をした暴走族の一団が、口笛を吹きながら、大通りのまん中で、パトカーといたちごっこをくり返す様を見て、動物園のヘビのようにおとなしく、生殖することさえ忘れてしまった痴呆症の老後をたった一人で過ごさなければいけないんだと、固く心に誓う淋しさを、押し入れに大事にとってあるアルバムにはりつけることは出来ないんだと、年がいもなくメソメソと涙腺をゆるませているのは、情けないことではないのです。

父よ、あなたは偉かった。ボクのおこした数々の親不孝を、「昭和」の悲しいメモリアルなどと言わないで下さい。美空ひばりが「悲しい酒」を唄うたびに流した涙の一しずくを、自分の過去とすり替えて、場末の安酒場でのみ込んだ後で放尿する快感は、何ものにも替えがたいと告白するあなたの正直に、日本の庶民のつつましさを見た、と批評する評論家のいいかげんさを、手っ取り早く抹殺したくて、止めるのも聞かず家を飛び出してかけ込んだ書店に丸尾末広の「ナショナル・キッド」と「少女椿」が山のように積み上げられていて、セーラー服を着た女子高校生の一群が、「キャー!」「ウソーッ」「ねえ、見て見て!」「マジーッ?」と叫びはしゃいでいる光景を目の当たりにして、ボクは思わずにはいられませんでした。「昭和」は遠くになりにけり。

父よ、あなたは偉かった。鼻クソをほじるように快楽を持てあそび、ティッシュペーパーで精液を拭い取るように悲劇を使いすて、しっぽのはえた知恵おくれの子供の未来に、一寸先の闇も残してはいけないと、消毒液でツルツルにみがき上げ、年をとるごとにブクブクと肥えていくオフクロの皮下脂肪を嘆くあまりに、ニシンになりたい、ニシンになりたいとこぼしながら、ポリポリと数の子をむさぼり食う正月の神棚に、今年こそは人類が破滅しますようにと祈りをささげるわびしさを、あなたといっしょに感じたくて、とうとうやってきたのです。

父よ、あなたは偉かった。ボクには一片のユートピアも残されてはいないのです。

丸尾末広コレクション《メンコ》

丸尾末広讃

高橋克彦

「フェノミナ」という映画を観たとき、ああ、これは丸尾末広の亜流だな、と思った。ダリオ・アルジェント好みの不気味な静寂とか、淡々とした筋運び、美少女ジェニファー・コネリーの人形的な動き、異常性格者の女教師、そして極め付けは、殺した死体を隠しておく地下の水槽一杯に蠢く蛆虫の山。その上、奇形まで登場するとあってはだが、私はこの映画を評価していない。丸尾末広の世界そのものと言っていい。丸尾末広を知らない人たちは、結構この映画に強い衝撃を受けたらしいが、私はすでに丸尾末広の創造した童貞厠之助と出会っていた。蛆虫に埋まりながら便槽にたゆたう厠之助の地獄を見たような目が瞼に焼き付けられていた私にとって「フェノミナ」は安っぽい二番煎じとしか映らなかったのである。

「フェノミナ」の公開は84年。丸尾末広はそれより一年も早くに厠之助を作品に登場させている。と言って先見の明があった、とは言わない。蛆虫が「フェノミナ」以降、世界の流行になったというなら、その先駆けは丸尾末広だったぜ、と叫ぶところだが、いかになんでも蛆虫は流行と無縁だ。ただ、「フェノミナ」の凄さを人が語るとき、常に蛆虫の詰まった水槽を最初に口にするので、そんなのはとっくに丸尾末広がやっていたよ、と注意をしておきたいだけに過ぎない。ダリオ・アルジェントはあの作品で監督としての評価を高めたわけだから、その評価のポイントが蛆虫にあったのなら、少なくとも丸尾末広だってダリオ・アルジェント以上の評価と収入を得てもおかしくないはずだ。

こんなことをいきなり書いたのは、私が世の中に対して憤慨しているからである。なぜに丸尾末広は大金持ちになれないのか？　読者は冗談で私がこの文章を書いたと笑っているだろうが、本当の本心である。才能に応じた収入を得るのが当たり前のはずなのに、丸尾末広は決して報われているとは思えない。何度か彼のアパートを訪ねたことがあるけれど、彼は真夏にもクーラーのない蒸し暑い部屋でつつましく暮らしていた。それ以上の細かなことを書けば彼のプライバシーの侵害となるので筆を止めるが、コンビニでアルバイトをしたって彼以上の生活は楽にできる。私は自宅に戻って彼の暮らしぶりを家内に伝えながら、悔しくて涙が溢れた。

なにが経済大国日本だよ、と悲しかった。

丸尾末広に好きな仕事をさせて、一軒の家を持たせることさえできない日本なのだ。どうでもいいような人間たちが札ビラを切り、無能な人間がもて囃されている。丸尾末広が豊かにならない限り、俺は日本人の芸術好きを認めないぞ、と家内に吠えた。

この日本に天才と呼べる者がいったい何人いるだろうか。私は丸尾末広がその一人であると信じて疑わない。丸尾末広と友人であることを私は誇りに感じている。人間的にも丸尾末広ほど優しい男はいない。だいたい今の忙しない世界で、一頁に丸一日をかける誠実な作家がどこに居るというのか。凡才なれば一頁に何日かけようと無意味であるが、丸尾末広は他の作家の何倍もの才能を持ちながら、こつこつと作品に取り組んでいるのである。だから収入にも限界がある。それでも彼はその姿勢を崩そうとしない。

それに彼は決して妥協しない。自分を本当に理解してくれている編集者としか仕事をしない。それは彼が常に自分の好きな世界を書き続けたいためだ。金で縛られてしまうと雑誌や読者に迎合しなければならなくなる。それも収入の道を狭くしている要因の一つだ。

しかし…だからこそ童貞厠之助のようなキャラクターや「少女椿」みたいなフリークス物をモノにすることができるのだ。百人の編集者のうち九九人までが、ああいう作品を普通は拒否するであろう。だが、一人は必ず頷く者が居る。その一人と出会うまで丸尾末広はじっと耐えている。そうして生まれたものがこれまでの作品なのだ。

好きだぜ！

丸尾末広が同時代に生きていてくれることにぼくらはもっと感謝しなければいけない。彼は自分自身よりも作品を愛し、その作品を通してぼくらの常識や作り物の倫理観を破壊してくれる。丸尾末広が居なかったなら、ぼくらの世界は嘘の愛で埋められてしまっていただろう。丸尾末広こそはネガティブのキリストだ。ヒトラーは確かに何百万のユダヤ人を殺したけれど、それは逆に大量殺戮の無残さを人類に教える役目を果たした。丸尾末広は悪を描くことで、ではない。丸尾末広は善を説くばかりが神真実の愛とはなにかを読者に提示しているのである。

丸尾末広コレクション《日光写真》

最新版日光寫真種紙

シェリフ
ホロ馬車
ウィンチェスター銃
月光仮面
ロボット
どくろ仮面
ボス！
祝十郎
人工衛星
騎兵隊員
宇宙人
勝新太郎
ロケット
とんま天狗
独眼流

甘露渦巻き飴

実相寺昭雄

なつかしい。なんて、なつかしいんだろう。お婆さんに目ん玉を舐められた記憶はないけれど、舐めてもらいたかった。……いや舐められた人は、うらやましい。きっと、世界がちがった風景に見え、時間もたえず渦巻くようになったろう。

もう、天井裏に身をひそめられる家もないけれど、丸尾末広(以下敬省略)のマンガを抱くと、乱歩の散歩者になれそうだ。耳も貝殻に変わり、いきみや、うめきや、あえぎが聞こえてくるようだ。

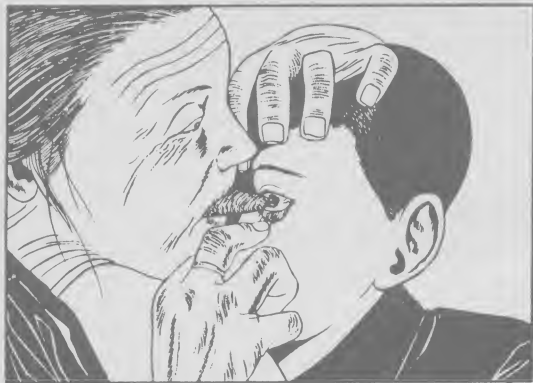
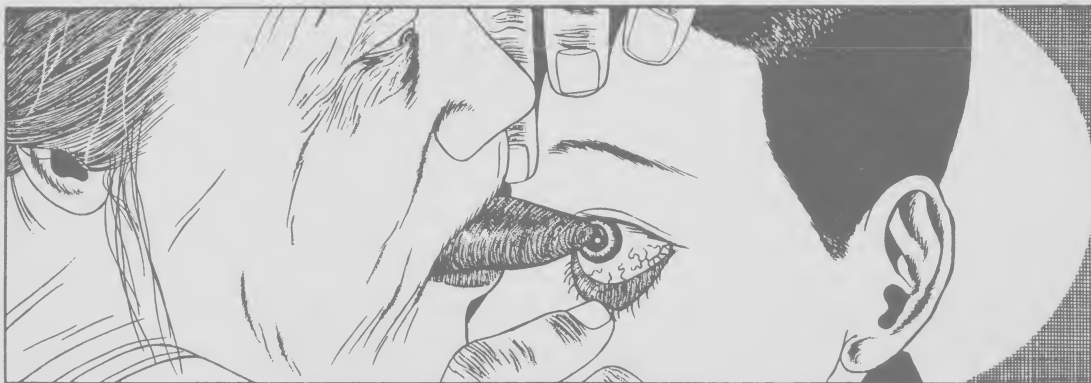
このタイムマシンに乗ると、渦巻き飴を、舐めたくなるのは何故だろう。活動写真の影響にちがいない。

なつかしい、……なつかしいのは少年の日の抒情だ。少女の便所を覗き見た記憶と一緒に、SMマンガから南天の匂いが立ち上がってくる。メンスの血を匂わせて、カレンダーがざわめいている。

そういえば、マスをかいて飛び出したザーメンも、渦巻き状にどこかへ消えていった、という気がする。でも、大人になってこのマンガにふれた途端、ぐるぐる宇宙を旋回していたザーメンが、ビシャッと自分の顔に跳ね返ってきたのだ。

ザーメンと一緒に、渦の中から、いろんなものがふりそそいでくる。つづらを開けた瞬間の、いじわる爺さん、婆さんの叫び声が谺する。

そこには「譚海」もある、赤い「家庭医学大全」もある、「デカメロン」や「夫婦生活」もある、「奇譚クラブ」や「裏窓」もあるし、メンコの乃木大将もある。お尻から蟯虫が顔を出すし、ビー玉が弾けている。ガチャンがあり、衛生博覧会が誘い、見せ物小屋の旗がなびく。カリガリ博士もいれば、マブゼ博士も笑う。ハート美人の広告が目に飛び込んでくる。クラブ歯磨の婦人が微笑み、割れたSP盤が雨に打たれている。蝸牛がペニスを這い、カーバイトの匂いが鼻をつく。

まだまだ、窒息した揚句、時の襞、直腸の闇に埋もれてしまいそうな世界が甦ってくる。しなびて、役立たずの竿が、記憶の池で泳ぎたがる。記憶の

肛門かもしれない。前門の張り子の虎、肛門の大奥。

教科書を開けば、そうだ、〝アカイ、アカイ、オメコガアカイ〟と声を揃えて、餌をもらったものだ。丸尾末広の世界は、猥褻という二文字で、芸術にならずに済んだ。〝美しき日々〟だ。ベケットの〝おお、美しき日々よ〟だ。想い出せ、想い出せ、走馬灯の幻、検便の日々よ、である。

セピア色の艶消し写真から、お婆さんが舌を出している。変身しろ、変身しろ、と蛇のように割れた舌が赤い。息が臭い。

丸尾末広のマンガには、笑いが充満している。尻にたかったブンブンいう蝿の笑いが、抒情の世界を彩っている。肥溜の中から、笑い声がひびき、肛門がすぼまる。

でも、これを他人と共有したくない。マンガに局部を映して一人ニヤニヤと悦に入り、落ちていた小銭を、あわてて拾って猫糞するような、小心者の鏡なんだから。……理屈責めでくる、巌ちゃんや、重ちゃんや、厚ちゃん達(国民小学校の苛めっ子)には貸してやらない。

あいつらもいい年だろう。娘とオメコした奴はいるんだろうか。玉姫殿か平安閣で娘を嫁にやり、金屏風の前にならんで、涙の花束を受け、処女を迅うになくした娘の、豚の体位を想像してるんだろうか。笑ってしまう。丸尾末広のマンガは、ほんとうに笑えるマンガなのだ、と渦巻き飴を、またペロリ。

でも、まだ実感がないけれど、死んじゃうんだよなあ。棺桶にマンガを入れてもらうかな。これだけ抒情的に生きてきたんだから。清く、しかも美しく、アダルトビデオには、モザイクをかけてきたんだし。天国へはいけるかなあ、……引揚げ船を下りた時に、DDTをふりかけられて、人生が狂ってしまったこと、誰に文句を言ってやろうか。透明人間に憧れて、このまま一生を終わりそうだ。

丸尾末広は絵が上手い。上手いから猥褻になれる。便所の落書きには苦労する。お絵描き天才だったお隣の馨ちゃんに、あのころ、何度もせがんだもんだ。〝アカイ、アカイ、オメコ、オメコ〟と。

渦巻き飴が、口の中に溶けてゆく。胃が痒いけれど、手が届かない。イチジク浣腸でもしてもらいに、SMクラブへ遊びにゆくしかないか。王子電車(都電荒川線)に乗って。他人と共有したくないけど、マンガを吐き出したくて、ウズウズしてくる。腹も膨らんできた。マンガで妊娠したのかもしれない。

なつかしい、なつかしい線路を、歩いてゆこう。

丸尾末広単行本リスト

「夢のQ－SAKU」
青林堂・82・12・25発行・A5判・¥880・176頁

学校の先生 『ALAN』第13号
笛吸童子 『JUNE』82・11
ウンコスープの作り方 『漫画ピラニア』82・02
初恋・壹萬壹千糠譚 『別冊SMファン』82・07
童貞厠之介・パラダイス 『漫画ピラニア』82・06
せんずり千太 『漫画ハンター』82・04
地獄の一季節 『漫画スキャンダル』82・05
美しい日々 『漫画ドッキリ号』81・12
きん玉のにぎり方 『漫画ピラニア』82・10
不能少年 『漫画ドッキリ号』81・02
腐ッタ夜／エディプスの黒い鳥 『漫画ピラニア』81・12
月食病院 『漫画エロス』82・09
雪子ちゃんの視た夢 『SMセレクト』82・06
あとがき・泥棒になりたい

「薔薇色ノ怪物」
青林堂・82・07・25発行・A5判・¥880・176頁

カリガリ博士復活 『マンガ宝島』82・03
リボンの騎士 不詳(80)
下男の習性 『漫画ピラニア』81・10
少女椿 『漫画ピラニア』81・08
僕らの眼球譚 『漫画カルメン』81・07
私ハアナタノ便所デス 『漫画ドッキリ号』81・05
少年Z 『漫画ピラニア』82・04
天然の美 『漫画ドッキリ号』81・06
童貞厠之介 『漫画ピラニア』81・04
血と薔薇 『漫画ドッキリ号』81・03
最モ痛イ遊戯 『漫画ドッキリ号』81・09
腐ッタ夜 『漫画ハンター』81・04
腐ッタ夜／ちんかじょん 『劇画悦楽号』82・01
解説・遠藤ミチロウ

◀「丸尾地獄」(限定千部・完売絶版)
青林堂・88・08月発行・B5判・¥3000・232頁

へび少年 『ホットドックプレス』87・08・25
金の手帳 『ガロ』88・07
少女椿 『漫画ピラニア』
カリガリ博士復活 『マンガ宝島』82・03
腐ッタ夜 『漫画ピラニア』81・12
APPARITION 『Fool's Mate』83・07
眠り男 (不明)
死よバンザイ 『チャンネル大戦争』87・07
僕の少年時代 『ガロ』83・08
童貞厠之介・パラダイス 『漫画ピラニア』82・06
せんずり千太 『漫画ハンター』82・04
リボンの騎士 不詳(80)
SOSボーイ 『コミックスコラ』86
最モ痛イ遊戯 『漫画ドッキリ号』81・09
びっくりホフマン (描き下ろし)
下男の習性 『漫画ピラニア』81・10
さらば昭和 『ガロ』88・07

「キンランドンス」
青林堂・85・09・01発行・A5判・¥880・176頁

お尻に火をつけて
月の砂漠
カクエイ先生怒りのキン玉
8月の濡れたアソコ
放屁論
ウコンゲッボ
豚小屋
終わりなき世のめでたさよ
スネコタンパコ
バカ女と豚男
真っ暗い日曜日
怪物団
少女椿「水子編」
あとがき・今だから話せる私の恥かしい過去

「DDT－僕、耳なし芳一です」▶
青林堂・83・11・25発行・A5判・¥880・176頁

僕の少年時代「ガロ」83・08
APARITION「Fool's Mate」83・07
プロレタリアートの秘かな愉しみ「SMマニア」83・03
あめりかうまれのせろいど「漫画ドッキリ号」81・08
ヴァンパイア「June」83・01
腐れオメコにDDT「漫画カルメン」83・05
あらかじめ不能の恋人達（I）「漫画カルメン」83・05
あらかじめ不能の恋人達（II）「漫画ドッキリ号」81・09
少女地獄「漫画ピラニア」82・08
最モ奥イ遊戯「劇画悦楽号」82・12
月よりの使者「漫画エロス」81・08
奇蹟の人「SMセレクト」82・02
童貞厠之介／俺の名はマイナス「漫画エロス」83・10
解説・岸田理生

「少女椿」
青林堂・84・09・25発行・A5判・¥1010・160頁

忍耐と服従
さまよえる日本人
侏儒が夜来る
平凡と明星
勧善懲悪機関
地獄に堕ちた庶民たち
喜びも悲しみも幾歳月
桜の花の満開の下
一幕劇・人生の並木道

「パラノイア・スター」
河出書房新社・86・01・31発行・A5判・¥880・160頁

SOJIN「グロビュール」
電気嬢「東京おとなクラブ」
贋作・電気嬢「小説王」
意志の勝利「銀星倶楽部」
保健室の吸血鬼「勉強堂」
日本人の惑星「銀星倶楽部」
玄牝「現代詩手帖」
解説・高橋睦郎

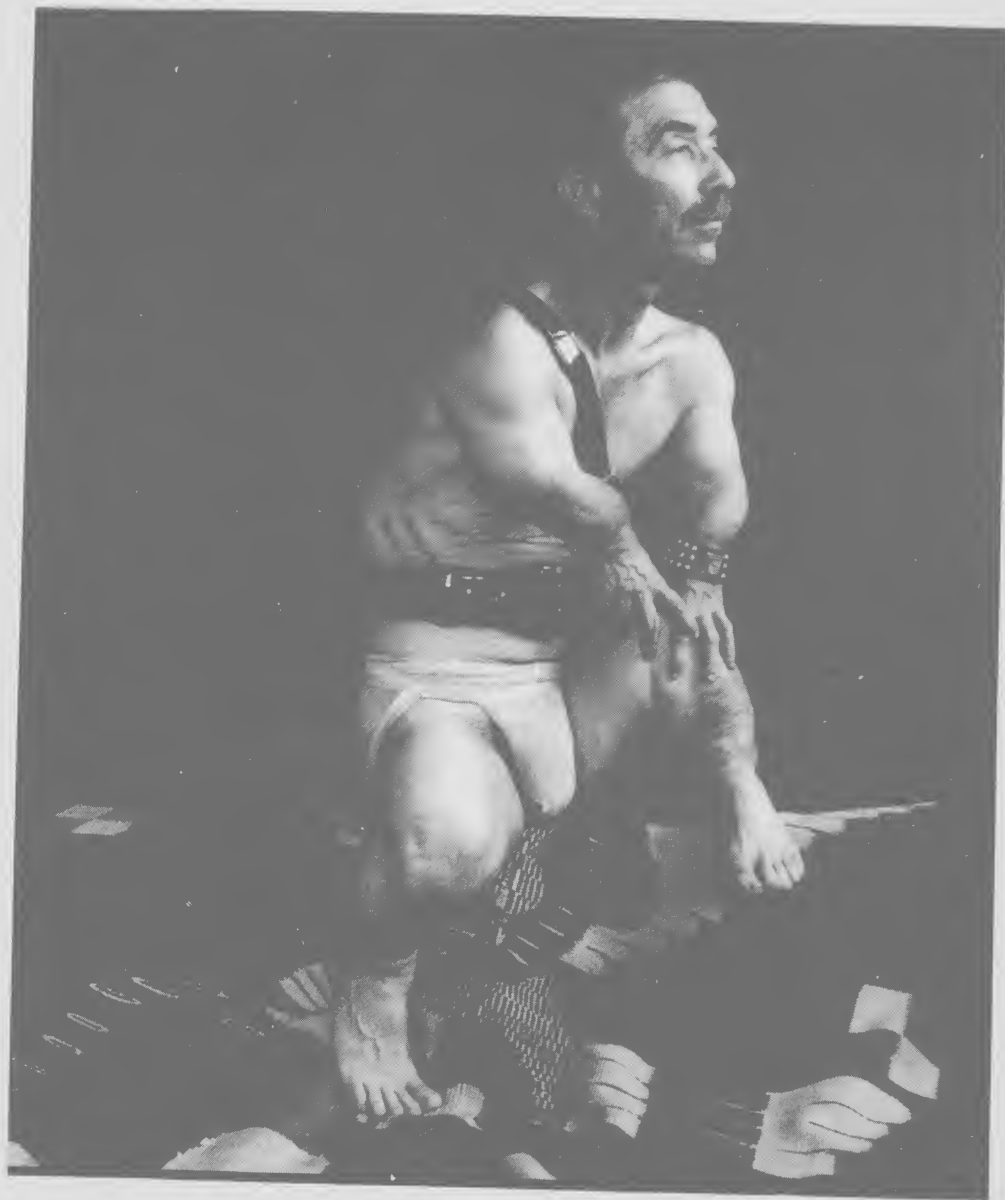
「丸尾末広・ONLY・YOU」（絶版）
東京おとなクラブ別冊・85・12・25発行・A5判・¥780・160頁

漫画「電気嬢」
インタビュー／米沢嘉博
自作解説
紙芝居「少女椿」
丸尾末広年譜　他
執筆陣
川本三郎　遠藤みちろう
高取英　根本敬　岸田理生
日野日出志　梅図かずお
花輪和一　他

「国立少年（ナショナル・キッド）」
青林堂・89・08・01発行・A5判・¥980・180頁

少年画報「SMスピリッツ」
へび少年「ホットドックプレス」
高校三年生「SMスピリッツ」
蛇苺・蛇苺2・蛇苺3「SMスピリッツ」
眠り男（不明）
ジョイ・ディビジョン「SMスピリッツ」
死よバンザイ「チャンネル大戦争」
カルネドール「ガロ」
SOSボーイ「コミックスコラ」
農林一号「SMスピリッツ」
さらば昭和「ガロ」
びっくりホフマン「丸尾地獄」
BAD「パンチザウルス」
長崎県南高来郡西有家町慈恩寺「パンチザウルス」
とっても恐い「パンチザウルス」
解説：四方田犬彦

予告「丸尾地獄II」（限定千部）
秘密のうちに着々と「丸尾地獄II」を計画中！
付録もついて「I」を上回る超豪華版！
予約開始はガロ誌上にて発表
発表以前のお手付き予約は一切受付ませんので
御注意いただきたい！
予告「丸尾末広版画（シルクスクリーン）」
製作決定！
詳しくは次号にて発表予定

無　抵　抗　都　市
NONRESISTANCE CITY

SUEHIRO MARUO

TOKYO P・X

一九四六・東京

ピ

ピッ
プ

ゴクン……
ギギィ

地
ろうそく
一本3円

ちゃんとお尻ふいた?
うん

おイモは?
あとでね

おくさん

おくさん

背中に百足(ムカデ)がついてますよ
えっ!?

ぢ

じっと
してなさい
とって
あげます
ぢ
ぢ
ぢ

ぢ・ぢ・ぢ・ぢ・ぢ・ぢ
パン
あっ

ボイッ

グジャ

グジッ

こんな処で
露店を
出しても
売れない
でしょう

闇市に
店を出せ
ないの
ですね
食べる
ものは
あります
か？

Chocolate

だめよ
!!

いいじゃ
ないです
か
かまわ
ないで
下さい!!

家へ来なさい
お米があります
野菜も少しあります

どうかご心配なく

私は誰かさんのように食料とひきかえにおくさんに悪さをするつもりはありませんから！

といっても信用してもらえないでしょうね……
ここで待っていて下さい
家から米をもってきます

魚
たべたい
そんなもの
あるわけ
ないでし
ょう

ないのよ
なん
にも…
私達には
何も
ないのよ

ガターン
あ

どうして
あそこで
まっていな
かったのです

ないのよ
………
おくさん
!

ずいぶん
探しました
お米と
野菜です
いりません
!
見ず
知らずの
人からいた
だけません!
勝手に
人の家に
入らないで
下さい
かえって
下さい
じゃ
ここに
置いて
ゆきます
又、来ま
すよ
あっ!!
パンだ
さわら
ないで
!
あの男は
何者かしら
どうして
私に
つきまとうの?
そんな事
わかってる
わ
これ
食べていい
?

食料を山とつまれても私はあの男を受け入れる事はできない

Tha ToKyo City
Ueno Outside Free Ma
atsuki_Gumi Atago-P.S
消費者ノ最モ買イ良イ民主的自由市場

あなた！
……
あなた！
早く
かえってきて
私を助けて
これ
食べても
いい？
あなた、
私達は
どうして
こんなに
みじめなの

あなた
あなた
私、この頃蜥蜴が見えてくるのよ

チョコレッ
いつもすみません
なんて不格好な男かしら

でもこの男のシャツにはアイロンがかかってるわ

奥さん引き揚げですか？
いえ……

私がなぜこんなに食料を持っているか
おくさんご不信に思いでしょうね
1ST CAV.DIV.
CP

私は米軍将校と知りあいなのです
彼が食料やら日用品やらわけてくれます
C- 18
RYOGOKU BRIDGE
SUMIDA RIVER
OVERHEAD
CLEARANCE

我が黄色い同胞より白い彼等のほうがよほど親切です
……とくに私のような者にたいして
私は平井と申します
これでもいちおう芸人なのですよ
どうぞよろしく！
わ、わたしは………
あなたの名は若杉セツ子
あの子は光…
えっ
し、知ってらしたの？
それぐらいの事は知ってますよ
ズ

おくさん
あなたの
ような美しい
女性が
なぜこんな
みじめな
生活を

浮島屋

BEER H

Whip it to me

ははははははははははは

次号へ続く